



信友会会報

2009年7月

<<6月例会より>>

信友会は、今年度の学びの一つとして、「旧約聖書における危機の時代に学ぶ」シリーズを取り上げています。4月例会には、森沢弘雅兄がダビデとソロモンの治世について語りました。6月例会はその2回目として、大村栄牧師から王国の分裂と北イスラエル王国の滅亡について解説いただきました。

信友会 6月例会

「北イスラエル王国の滅亡 失われた10部族」

大村 栄 牧師

1. ソロモンの背信

イスラエル王国の分裂は、ソロモン王の長い統治の後半に、政治・経済的な繁栄の中でダビデから引き継いだ信仰を棄て、外国の異教の女性に心を惑わせたことから始まる。これはソロモンが単に女性の誘惑に負けたのではなく王国の経営のために近隣の国とのよしみを結ぶ意味もあった。列王記上13章3節には700人の王妃と300人の側室と書いてある。この女性達は老境のソロモンの心を惑わせ他の宗教に向かわせた。5節ではシドン人の女神アシュトレト、アンモン人の憎むべき神ミルコムに従ったと。6節では、ソロモンは、主の目に悪とされることを行い、父ダビデのように主に従わなかったとある。

ネバトの子ヤロブアムは、ソロモンの有能な部下であったが、シロの預言者アヒヤに会い、その預言を聞いた。アヒヤは自分の衣を十二切れに引き裂き、十切れを取れと言った。ソロモンが主を棄てて、異国の神々を伏し拝んだ故である。預言では、ヤロブアムにはイスラエル12部族のうち10部族を与えるが、ソロモンの家にはダビデの信仰のゆえに1部族を残す(11章31節~)とある。ヤロブアムは、ソロモンに反旗を翻したが、ソロモンが殺そうとしたのでエジプトに逃れ、ソロモンが死ぬまでそこに留まった。ソロモンは40年の統治後に死亡し、後継の王はソロモンの子のレハブアムとなった。



2. イスラエル王国の分裂(BC922年)

ヤロブアムはソロモンの死を知ってエジプトから戻り、レハブアム王にソロモンが民衆に課していた過酷な労働、重い軛を軽くするようお願いした。レハブアム王は、ソロモンの時代からの長老達の勧めた、民への優しい言葉ではなく、共に育った若者達の、「わたしの小指は父の腰より太い」、「父が鞭で懲らしめたのなら、私はさそりでも懲らしめる」と更に重い軛を課す方を命じた。これによって、イスラエルの民衆はダビデの家に我々の受け継ぐものは無く、エッサイの子と共にする嗣業は無いとしてヤロブアムに集まった。イスラエルは、ヤロブアム王の10部族からなる北イスラエル王国と、レハブアム王のユダ族(シメオン族を吸収)のみの南ユダ王国に分裂した。

レハブアム王の南ユダ王国は、バビロンの捕囚をはさみイエスの時代まで継続した。しかし北イスラエル王国は、王権の争奪戦を繰り返し王位が変遷した。

ヤロブアム王は、民衆が生贄を捧げるために神が定めたエルサレム神殿に上れば、民心が南ユダ王国に向かうという疑念をもち、金の子牛を二体造ってベテルとダンに置きエルサレム神殿の代わりに金の子牛を礼拝させることにした。このヤロブアムの主への裏切りは、神の怒りを受けて22年の統治にとどまり、息子ナダブに引き継がれた。ナダブもまた、ヤロブアムと同様の罪を犯し2年の統治の後にパシャに殺された。その後の北イスラエル王国は、王権が長続きすることなく変遷した。

3. 最悪の王アハブ

オムリ王の子のアハブは、イスラエル最悪の王であった。彼より前の誰よりも主の目に悪とすることを行った。シドンの王女イゼベルと結婚して父オムリ王が築いたサマリアで22年間統治したが、サマリアにバアル神殿を建立し、また、アシェラ像を造ってイスラエルの神、主の怒りをつけた。預言者エリヤは、アハブ王とイゼベルの悪行に対して、神の意を受けて何度も対決することになる。まず、神の怒りにより数年間雨が降らないとの預言をした。イゼベルはサマリアのひどい飢饉の報復として多くの預言者を殺した。エリヤは神の命令により、バアルの預言者450人とアシェラの預言者400人とどちらが神であるかを競いこれら異教の預言者を殺した。エリヤはこれらの対決の後、王妃イゼベルの追及を受けて疲れ果て、ホレブの山に向かった。エリヤは、そこで静かにささやく声を聞き、ハイザルをアラムの王に、イエフをイスラエルの王に、エリシャを後継の預言者にするため油を注ぐように、また、イスラエルに7千人の勇者を残すとの声を聞いた。(列王記上19章)

アハブ王とアラムのベン・ハダトとの3度目の戦いでは、ユダの王ヨシャファトと共にラモト・ギレアドをアラムから奪還する戦を仕かけた。アハブは、多くの預言者を呼び集めて攻めるか否かを訊ね、また、主の預言者ミカヤにも訊ねたがアハブの行いに対する神の怒りを預言して捕えられた。アハブとヨシャファトはラモト・ギレアドを攻めたが、アハブは鎧の隙間から矢を受け死亡した。アハブとイゼベルの子アハズヤはアハブを継いで2年間イスラエルの王になったが、主の目に悪とされること行い、また、父母の道、ヤロブアムと同じ道を歩んだ。アハズヤは宮殿の欄干から落ちて怪我をしたときに、バアルやゼブフの神に伺いを立てようとし、エリヤの預言の通りに死亡した。アハズヤには子が無くアハブの子ヨラムが継ぎ12年間王位にあった。ヨラム王は、主の目に悪とされることを行ったが父母ほどでなくバアルの神殿を倒したりもした。しかしヤロブアムと同じ罪を犯し続けた。

4. イエフ王朝とその後の王の振る舞い

イエフは、北イスラエル王国の将軍としてラモト・ギレアドにいた時に、預言者エリシャの命令を受けた者から油を注がれ、イスラエルの王とされると預言された。イエフは軍を率いてヨラム王を殺し、イゼベル王妃を初めアハブ王の70人の子供などすべてを殺しイスラエルの王となった(BC842年)。また、イエフ王は、アハブよりバアル神への信仰が強いと偽り、全てのバアル神の預言者をバアル神殿に集めて殺した。しかし、イエフは主を裏切るヤロブアムの罪からは離れず、ベテルとダンにある金の小牛の像を退けなかった。このため、イエフの王位はサマリアで22年続いたが、シリアのハザエルに攻められヨルダン川東側を全て失った。それでもこの王朝は100年続いた。

イエフ王の時代アッシリア帝国が強大であり、イエフ王がアッシリアに恭順の意を表して朝貢した記録が大英博物館にあるシャルマナサル3世による黒オベリスクの碑文に残されている。イエフの3代目、孫のヨアシユ王は、アラムの攻撃的なハザエルの死去でアラム軍を撃退し領土を回復した。また、ユダ王国のアツマヤ王の攻撃を受けたシリア・エフライム戦争(BC735年)に勝ち、北王国の軍事力の回復、平和と繁栄を勝ち取った。

ヤロブアム 2 世の時代は、北イスラエル王朝の中で一番安定し繁栄した。この時代、北の強国アッシリアが内部分裂を起し、南下する力を弱めた時代であった。列王記下 1 4 章 2 3 節からは、ヨアシュの子ヤロブアムは 4 1 年間王位にあり、主の目に悪とされたヤロブアムの罪から離れなかったが、預言者ヨナの言葉を実行してレボ・ハマトからアラバ海までイスラエルの領域を広げた。国を広げ、安定した統治がなされたので国力を回復できた。この時代の後半に活躍した預言者アモスは、アモス書の中で権力者や富める人だけが栄え、貧者が抑圧されている現実や民衆の信仰心の欠如を強く非難している。

ヤロブアム 2 世の後を継いだゼカリヤ王は、6 ヶ月間王位にあったがヤロブアムの罪から離れず、シャルムの謀反により殺害された。神がイエフに言われた通り、イエフの王朝は 4 代で終わった。シャルム王は、サマリアで 1 ヶ月間王位にあったが、メナヘムに殺された。メナヘムはサマリアで王位に就き 1 0 年間統治した。アッシリアのティグラト・ピレセルが攻めてきた時には、メナヘム王は朝貢品を贈って服従したが、この朝貢のためイスラエルの有力者から銀 5 0 シェケル集め不評をかった。メナヘムの死後、息子のペカフヤが王位に就いた。2 年間の統治であったが主の目に悪とされることを行った。ペカフヤの侍従ペカは謀反を起し 5 0 人の



のギレアト人と組んでペカフヤ王を殺して王位に就いた。

5. 北イスラエル王国の滅亡(BC 722年)

ペカ王は 2 0 年王位にあったが、この時代、アッシリアの王、ティグラト・ピレセルが攻め込み、ナフタリまでのイスラエル北部を占領して住民を捕囚としてアッシリアに連れ去った。謀反を起しペカを殺して王位に就いたホシュア王の統治は 9 年間であった。アッシリアのシャルナマナサル王が攻め上り、ホシュア王は最初服従して貢物を納めたが、後にエジプトの王ソと同盟を結びアッシリアに朝貢品を送らなかった。アッシリア王は、攻め上って

サマリアを 3 年間包囲して陥落させて、2 0 0 年続いた北イスラエル王国は滅亡した。住民は捕らえられてアッシリアに連れ帰られ、ヘラ、ハボル、ゴザン川、メディアの町に分散して住ませた。また、北イスラエルの地にはアッシリアの占領政策でユダヤ人以外の異邦人を住ませたので、ユダヤ人と異邦サマリア人との対立の火種になった。

聖書は、列王記下の 1 7 章 7 節以降で、イスラエルの滅亡はユダヤ人をエジプトの地から解放した彼らの神、主に対して罪を犯して他の神々を畏れ敬い、主がイスラエルの人々の前から追い払った諸国の風習に従って歩んだ故であると語る。主はユダヤ人の度重なる裏切りに、多くの預言者を遣わして警告してきたが裏切りを繰り返した。主の戒めをことごとく捨て、鑄像、二体の子牛像やアシェラ像を造りバアルに仕え、主の目に悪とされることを行い主の怒りを招いた。主はイスラエルに対して激しく憤り、彼等を御前から退け、ただユダの部族しか残さなかったと書いている。

6. 失われたイスラエル 10 部族の行方

北イスラエルの滅亡により、王国を構成していたイスラエル 1 0 部族はアッシリアに捕囚として連れ去られ、その後歴史の間に消えていった。その原因は、この時代にはユダヤ人のアイデンティティーがまだ出来ていなかったのではないかと推測される。南ユダ王国の 5 0 年のバビロン捕囚による抑圧を通して、遠くエルサレムを臨み、ユダヤ教を堅持して律法を遵守する民族意識をもって世界に出てゆく矜持がまだなかったと思われる。その後の 1 0 部族は、世界史のどこにも現れないが、その消息を辿るエピソードがいろいろある。

日本でのエピソードを紹介すると、ユダヤ教のラビで長く日本に住んだ、トケイアが書いた「日本ユダヤ封印の古代史」がある。そこでは、ユダヤと日本の風俗習慣に、他には無い共通点があると言う。風呂に身を清めて入ること、靴を脱いで家に入ること、塩の使用や水で清めること、ユダヤの幕屋や契約の箱とお宮やみこしの形などがある。トケイアは日本の皇室を意識して書いている。

北イスラエル王国の滅亡は、ソロモンの信仰のルーズさが招き、最初に北イスラエルの王位に就いたヤロブアムがユダヤの大多数の10部族を率いながら、エジプトから救い出した神、主の契約を破り、バアル信仰を受継いだこと。歴代の王もヤロブアムの道を引き継いでユダヤ人としての信仰と律法を失ったことにある。

(その後の討論で次のような話があった)

- ・ 北イスラエルの民の消息は、アッシリアのばらばらに住ませた支配政策と関係があった。民衆がサマリヤを離れた段階で自主性を失い、移住先の異邦人と混血を繰り返して多神教を受け入れるうち、自然にユダヤ人としての民族性を無くしたのではないか。
- ・ ディアスポラのユダヤ人は、バビロン捕囚時代に確立された、心の中にエルサレムを臨みユダヤ教の信仰と律法を頑なに守っている。迫害を受けるほど強い意識をもってコミュニティーを作りユダヤ人のアイデンティティーを創りあげた。(文責：玉澤武之)